

博士論文の要旨

氏 名 塩崎俊彦

論文題目 俳文芸史攷

学位申請論文『俳文芸史攷』は、俳諧という文芸が、それを愉しむ人々の日々の営みと不可分なものであったという観点から、江戸時代の俳人の生活や生業と俳諧の関わり、形骸化した宗教的儀礼としての法楽・奉納と俳諧をめぐる問題、あるいは近代の新聞というメディアが俳句革新運動に果たした役割などについて論じるものである。

序章では近代における西欧文芸思潮の受容によって、文学が日常現実の世界から切り離されたことで、人の営みのなかで文芸を捉えることが困難になったことを述べる。次に、連歌俳諧の発生が、そもそも二人以上の個性による遊戯的な言葉のやりとりであったことから、コミュニケーションを円滑にするための方略として、挨拶性、機智性、即興性という特性を想定する。また、連歌俳諧がこうした特性を持つ文芸であるがゆえに、人の営みのなかで文芸の価値を考える必要があることを説いた。

第一章は初期俳諧を対象とする。

「貞室自筆『貞徳終焉記』について」は、貞徳の後継者をめぐる論争のなかでしばしば取り上げられる安原貞室の『貞徳終焉記』について、その存在が不明となっていた貞室自筆本が滋賀県の「夢望庵文庫」に所蔵されていたことを報告したもの。貞室自筆本には「貞徳終焉記」の標題はなく、本作が後世の俳人の「終焉記」とは異なる規範を持つこと、それは宗長の「宗祇終焉記」などと同様に、中世以来の文人の晩年を綴る散文の流れにあるものであったことを論じた。

「土地の名を詠むことー松山玖也『東下り富士一見記』に即して」では、俳諧の紀行文の特徴を明らかにするために、松山玖也『東下り富士一見記』をはじめ近世初期の歌人らの<旅の記>を取り上げる。中世の連歌師が必要に迫られて旅をするようになって以来、都にあって遠隔の地にある歌枕を和歌に詠むことと、実際に彼の地に赴いてその現実を目の当りにすることの齟齬が、<旅の記>を変質させていったこと、また、そうした齟齬は『土左日記』以来、土地の名を和歌に詠むことそのものが、言語遊戯性の強い理知的なものであったことに由来するものであったことを論じた。こうした<旅の記>の性格が、松尾芭蕉の『おくのほそ道』をはじめとする近世の俳諧師の紀行文に繋がるものであったことを指摘する。

「万句興行から矢数俳諧へー法楽／奉納の視点から」では、井原西鶴の『大句数』、『西鶴大矢数』をはじめとする談林期に盛行した矢数俳諧が、いずれもその背景に法楽／奉納という、宗教的な営みの側面を持っていた事実をもとに、西鶴が矢数俳諧で演じたパフォーマンスもまた、法楽／奉納に通じるものであったことを述べる。

第二章は芭蕉以降の俳諧を対象とする。

「服部土芳の生活と俳諧」では、芭蕉の高弟で『三冊子』の著者である服部土芳の武家としての生活と芭蕉顕彰の俳諧活動について概観する。さらに、伊賀市に寄託されている沖森文庫の俳書のうち、土芳らの句会の記録である『芳門句帖』をとりあげて、土芳による句会の実態を提示し、伊賀上野における俳諧が、武士と上層町人層のゆるやかな交流なかで続けられていたことを論じる。

「画師の生業と俳諧—明和三年の大火と蕪村の讃岐行」では、明和三年、与謝蕪村が唐突に讃岐へ下向したことの理由について検証した。俳諧を嗜んでいた金毘羅の上層町人層の有力者である菅暮牛邸が明和三年一月に類焼し、その改築に際しての調度を調えるために京都の画師である蕪村が選ばれた可能性を、金毘羅衆と京俳壇の繋がりなどから検討した。

第三章は、近代俳句、特に正岡子規が本格的に俳句革新運動を展開するまでの時期を対象とする。

「異相の文明開化—擬洋風と散切物と新題目」では、建築様式としての擬洋風、歌舞伎の散切物といった、西欧と日本の伝統がないまぜとなった明治初期の文化的特徴を明らかにし、旧派俳諧師が好んで詠んだ「新題目」が、これと同質のものであることを論じた。これに対して、正岡子規らの俳句革新運動は、西欧に対する「日本」を強く意識することで、開化日本にふさわしい新たな伝統の創造の一翼を担うようになったことを指摘する。

「海南新聞の俳句記事一斑—『ほととぎす』創刊前夜」では、新聞という新しいメディアが子規らの俳句革新運動に果たした役割について、松山の「海南新聞」の俳句欄の変遷をたどりつつ解明する。子規とは旧知の海南新聞記者柳原極堂らが、旧派が主導していた海南新聞の俳句欄を子規ら新派俳人の牙城としたこと、その過程で海南新聞の俳句欄の撰者を東京の子規に依頼し、多数の投稿俳句を東京の子規との間でやりとりしながら、それらを編集して紙面に載せていたことを跡付ける。こうした経験が、のちに子規と極堂によって、松山で新派の俳句雑誌『ほととぎす』を創刊することに繋がったものであることを論じた。